

氏名（本籍） モロ タ ダイ スケ 諸 田 大 輔（静岡県）  
 学位の種類 博 士 （音 楽）  
 学位記番号 博 音 第 98 号  
 学位授与年月日 平 成 19年 3 月 26日  
 学位論文等題目 〈論文〉 ドレスデンのフルート奏者とJ. S. バッハ  
 -1724年のカンタータにおけるフルート起用の背景を巡って-

論文等審査委員

（総合主査）	東京芸術大学	教 授	（音楽学部）	金 昌 国
（演奏審査主査）	〃	〃	（ 〃 ）	金 昌 国
（演奏副査）	〃	〃	（ 〃 ）	村 井 祐 児
（ 〃 ）	〃	〃	（ 〃 ）	中 嶋 敬 彦
（ 〃 ）	〃	助教授	（ 〃 ）	小 畑 善 昭
（ 〃 ）	〃	〃	（ 〃 ）	大 角 欣 矢
（論文審査主査）	〃	教 授	（ 〃 ）	金 昌 国
（論文副査）	〃	〃	（ 〃 ）	村 井 祐 児
（ 〃 ）	〃	〃	（ 〃 ）	中 嶋 敬 彦
（ 〃 ）	〃	助教授	（ 〃 ）	小 畑 善 昭
（ 〃 ）	〃	〃	（ 〃 ）	大 角 欣 矢

（論文内容の要旨）

18世紀初頭にフルート（Flauto traversoの意で用いる）は独奏楽器としての位置を獲得し、この時期から多くのフルートを使用した作品が生み出された。ヨハン・セバスティアン・バッハのフルートソナタ等もそうした流れの中にあり今日もその真偽を含め様々な研究が行なわれている。私は修士論文においてこの時期の教会音楽であるJ. S. バッハのカンタータに興味を持ち1724年の晩夏のカンタータに一人の卓越したフルート奏者が関わっている事に注目した。この1724年のフルート起用は、これまでロバート・L・マーシャルや、マルチェロ・カステラーニによって言及されているが、双方においてはフルート・ソナタや、無伴奏パルティータの作曲年代研究に焦点を当てている。従って1724年晩夏におけるフルート起用カンタータの詳細な分析や、そのフルート奏者の実像については副次的に述べられているにすぎない。私はこれらの先行研究における論拠に疑問を持ち、主眼を1724年のフルート起用とそのフルート奏者の実像に置き、修士論文において検証した。

J. S. バッハのカンタータにおけるフルート起用を検証した結果、フルートは1724年晩夏に到るまでに徐々に現れるのではなく突然に時期の限定を伴い使用される事が判った。またその難易度もこの時期においてのみ突発的に高度になり、特にBWV94、113、99、8、では客演としての扱いが見受けられた。そのため、この時期に高度な技術をもつフルート奏者がライプツィヒを訪れたものと考察し、当時ドレスデンで活躍していたピエール・ガブリエル・ビュッファルダンとバッハの関係を検証した。その結果私は「時期の限定」と「特別に困難な技巧」を主な理由としてその問題の時期におけるフルート奏者はドレスデンにいた名手ビュッファルダンであったとの推測に到った。

しかしこの修士論文における推測にはまだ多くの問題が残っている。例えばビュッファルダンがドレスデン宮廷の仕事をし、ライプツィヒへ来る事が可能であったかどうかはさらに詳細なドレスデンの音楽環境を調べる必要がある。またドレスデン宮廷には1724年当時J. J. クヴァンツの他にJ. M. ブロツホヴィッツというこれまで注目される機会の少なかったフルート奏者が存在し、彼がこの1724年にJ. S.

バッハと関った可能性も否定できない。さらに広げて考えれば、より遠方からの客演も視野に入れることも出来る。これらの疑問は、先に述べた先行研究においても、解消されていない。

この論文は、バッハの1724年晩夏におけるフルート起用を最大焦点とする初めての考察である。また、1724年のフルート奏者が本当にビュッファルダンであったのか、という問いの鍵となるザクセン選帝侯領の首都ドレスデンにおけるフルート受容を俯瞰し、問題の奏者の解明に正面から取り組む最初の論文である。

ヴィルトゥオーソ楽器としてはまだ発展の出発点に立つフルート、そしてそのフルート奏者が1724年のバッハのフルート起用によってどのような方向性を得たのか。ドレスデンのフルート奏者、ビュッファルダンとブロッホヴィッツの作品と音楽環境を考察したとき、それらがバッハの1724年のフルート起用にどのような影響をもたらしたか。また、1724年における卓越したフルート奏者との共同作業が、バッハの「フルート像」にどのような影響を及ぼしたか、本稿において明確に照らし出したい。